

たより 『美紗の会』

第二九号

平成五年十月十五日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

日独文化交流に一役

市民に与えた感銘

九月六日、閑崎ひで女幸いる閑崎流地唄舞べルリンフェステイバル参加の一行十一人はベルリン空港に到着。西松師は唄と三弦を受け持つ重要な演者。一行は休む暇もなく翌七日にはオペラ劇場で共同記者会見。

報道陣に地唄舞と日本文化について話、熱心な質疑に応じる。そして同じ日には早くも公演の晴れ舞台となるシュロス劇場でリハーサル。シュロス劇場はベルリンから車で一時間、ポツダム市にあるサンクスーシ宮殿の近くにあるロココ芸術の傑作。第二次大戦後ポツダム協定が結ばれたその場所で、一般に公開されるのは初めてだそう。八日午後八時いよいよ開演。『こすの戸』『菊の露』『残

ドイツ公演を終えて 橋場はつえ

はじめて訪れたドイツ、ベルリンはすでに秋の気配であった。落ちついた無駄のないたたずまいの街に色づき始めた木々の葉が秋の訪れを告げていた。

今回の公演は計五回という独行スケジュールだったので終始緊張感のぬけない旅であったけれど七年ぶりのヨーロッパ、それも「日本とヨーロッパ展」と大がかりなフェスティバルに参加出来たという

月』『ゆき』と一時間半の舞台だったが、満員の観客からは絶賛の拍手が鳴り止まなかった。夜はブランデンブルグ州知事主催の歓迎パーティー。ドイツ風の温かい歓迎の宴に一同感激。

九日、アポロザールのオペラ劇場でリハーサル。夜はツゲル湖畔で木村駐独大使の激励夕食会。

十日午後八時開演。オペラ劇場での公演切符は早くから売り切れて、日本から出掛け

喜びが実感となって、今でも熱狂的な拍手の残響が耳元でうずまいてるのを感じる。こがでる。

ポツダム協定がかわされた歴史的な宮殿劇場の重みが二本のろうそくの静かな炎を揺らし、私の唄も微妙に観衆の中にとけて行った。プラボ一の歓声と共に始まった公演はベルリンの古いオペラ劇場でも二回とも売り切れという大盛況で、ケルンのダンス学

どうして小唄など唄うようになっちゃったのかと、私はとき時思うことがあります。楽しみで小唄を唄うということが、まず小唄という麻薬に触れた始まりで、面白くて仕方がない時期を過ぎると、今度は苦しくなってきた。唄ってこれと

も三年も唄わない時があります。これはどう唄ったら良いのだろう。歌詞を讀んで、テープを聞いて、師匠の前で稽古して、それでもまだ出ない。それが出すようになったら、二か

園から追放されて労働することになりました。小唄もそんなものですね。しかし一度食べた以上、それも仕方ありません。唄うという字は口偏(くちへん)に貝と書きます。字を作った人は皮肉です。なるべく目のように口を開いて唄わない方が、身のためですよと教えているのかも知れません。楽しいふりをして、苦しんで唄う。それで唄の神様に許してもらうことにいたします。

イヴのりんごと小唄

国学院大学院友会顧問 高藤昇

月か三か月は稽古して工夫する。それでも会心の出来といふのは、十回唄っても一回もないのが普通です。可愛いイヴのすすめで、リンゴを食べたアダムは、楽

昇 皮肉です。なるべく目のように口を開いて唄わない方が、身のためですよと教えているのかも知れません。楽しいふりをして、苦しんで唄う。それで唄の神様に許してもらうことにいたします。

晩秋の公演予定

ドイツからの帰国あと息継ぐ間もなく会主は国立小劇場での閑崎一門の『華の会』への出演を終え、さらに十月九日には昨年に続き中野梅若能楽堂の「大和松時・舞の会」で『葵の上』の地方を演じるなど精力的な演奏活動を行っている。

その他、今後年内に予定されている公演には次のようなものがある。

会員の支援が期待される。

* 十一月九日、赤羽「北とびあ」において「閑崎ひさ女・舞の会」に出演。

* 「茶音頭」と「ゆき」で地方を演じる。

* 十一月十一日、渋谷東邦生命ホールで第三回松風会。

今回は西松文一師のCD四枚組の発売を記念しての公演。当日は西松孝子師の琴と『夕顔』を共演。

会主の独演は「影法師」。舞の神崎流三代目宗家、神崎秀珠師が出演する『珠取り』は圧巻となろう。

文一師の芸について、小山観翁・中井 猛・神 正、三氏の対談も予定されている。

* 十一月二十八日はいよいよ「汐風がはこぶ邦楽の夕べ」と名付けられた晴海停泊中の「にっぽん丸」船上での演奏会。ドイツ・アメリカの公演に会主と同行し、絶賛を博した尺八の宮崎青歌。また琴の西松孝子が賛助出演。邦楽愛好家には逃せない絶好の機会となろう。予定曲目は『残月』『今朝の雨』ほか。

